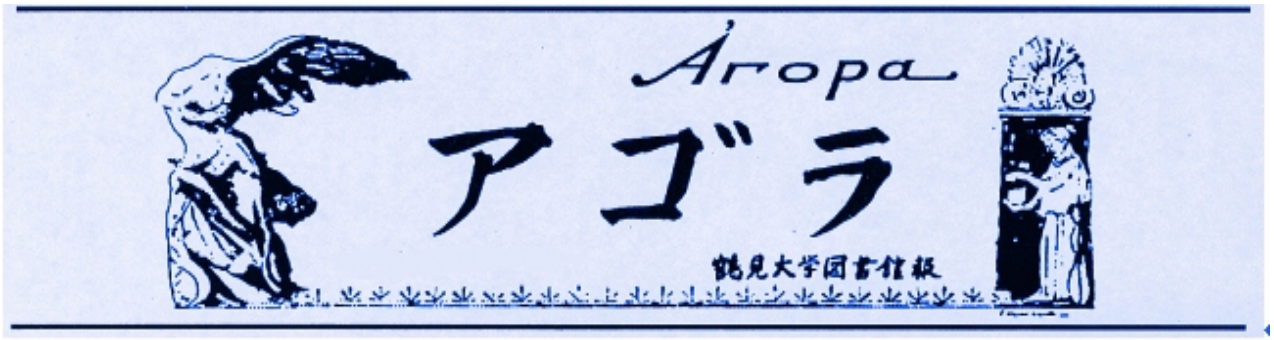
2006年1月25日　第120号



目　次

貴重書紹介　『枕草子』　……p. 1
ぺんどる考　財団法人青少年国際交流推進センター理事　寺下　英明……p. 2-3
図書館からのお知らせ　……p. 4

『枕草子』　寛永年間(1624-1644)刊　袋綴4冊(巻1欠)

1600年前後、木に活字を彫りそれを組み合わせてさまざまな出版が行われた。李氏朝鮮の書物文化に強い影響を受けたこの画期的印刷を、古活字版と呼ぶ。『伊勢物語』『竹取物語』『源氏物語』『方丈記』『徒然草』など誰もが知っている日本の古典文学は、綿々と手で写し伝えられてきたが、この新技術によって初めて出版物となったのである。しかしこの技術はほぼ半世紀の間しか続かず、制作部数がかなり少なかったため、現在いずれの古活字版も希覯本となっている。ここに紹介する古活字版『枕草子』は、惜しいことに第1冊目を欠くが、比較的良好な保存状態であり、江戸時代初期の風趣を偲ぶに足る。

紺色地に雷文繋ぎ・唐草を艶刷りした紙表紙(縦27.9、横18.9糎)は、古く味わいのあるもの、しかし改装後補。寛永以降の改装であることは、素材・制作によって明らか。第2・4冊には題簽が残り(第4冊は藍雲紙)、「清少納言枕草紙　巻二(四)」と墨書する。巻首題なく、各冊尾題「清少納言巻二(~五)終」。毎半葉13行22字程度(印刷面縦約22.0、横16.5糎)、平仮名主体に漢字若干を交え、仮名連続活字使用。振仮名付活字はない。全体に墨の句読点・濁点・イ本校合・振漢字・傍注あり。各冊の内容は、巻2　集は~かきまさりする物、巻3　あはれなるもの~寺は、巻4冊　陀羅尼は~わろきもの、第5　下かさねは~見くるしきもの。巻5の第5丁ウラの上部余白に「たゝあしたはさしもあらすさえつる空の」(三巻本「けさはさしもあらさりつる空の」)末尾、能因本系諸本にない文章を29行にわたって細字頭書。三巻本より補ったものと推される。

『枕草子』の古活字版は10行・12行・13行の3種、前2者は慶長年間(1596~1615)、掲出の13行本は寛永年間(1624~1644)後半の刊行であろう。本文は、三巻本・能因本・堺本・前田家本4系統のうち、古活字版すべて能因本に依拠する。ついで慶安2年(1649)整版本が出、江戸時代の流布本となる。これは、古活字版13行本を基礎としさまざまに手を入れた結果、相当あやしげな本文と化してしまっている。

(図は第2巻4丁ウラ・5丁オモテ。左側「びやうぶのうしろなど」以下2丁分が慶安版本では脱落)

ぺんどる考

財団法人青少年国際交流推進センター理事
寺下　英明

あの戦いが終わった少年期、私の願いは些かの背伸び「万巻の書を読み万里を旅する」ことであった。いつの間にか私の部屋は古本と廉価本で埋まり、パスポートには50余の出国印が残された。

私は国の青年の船事業に深く関わっている船人の一人である。過日、練習帆船海王丸の三等水夫同士の一瀬高帆氏から『世界で一番小さな辞典』一瀬高帆（東京図書出版社）を贈られた。書架の同版形の『愉快辞典』鈴木芳徳（白桃書房）『おもしろ奇語辞典』萩谷朴（新潮社）に並べて納める。その奇語辞典に船人として興味津々の一項を見る。

事柄は、かの古典文学の『枕草子』の終わり近く「うちとくまじきもの」（気が許せず安心出来ないもの）として書かれている航海記に関わる。

清少納言（一説に966年出生）が活躍した平安中期は、すでに遣唐使（630-840年）の大船が大海を往来した後の時代ではあるが、内海航路は竜骨を持たない未発達な組立構造船である。宮廷の几帳の奥のやんごとなき女性の航海記それ自体、極めて稀な一文であるが、才媛の筆なれば、大海の渺渺と深絶の真実、対峙する人の畏怖の心情を描いて、短文ながら、私には、同時代の航海記、紀貫之の『土佐日記』を凌駕する名文に思われる。早速に一節をあげる。情景は船出のシーンである。

> 「思えば、船に乗りてありく人ばかり、あさましうゆゆしきものこそなけれ。よろしき深さなどにてだに、さるはかなきものに乗りて漕ぎ出づべきにもあらぬや。まいて、そこひも知らず、千尋（ちひろ）などあらんよ。ものをいと多く積み入れたれば、水際はただ一尺ばかりだになきに、下衆（げす）どものいささかおそろしとも思はで走りありき、つゆあしうもせば沈みやせんと思ふを、大きなる松の木などの二三尺にてまろなる、五つ六つ、ほうほうと投げ入れなどするこそいみじけれ」
>
> 池田亀鑑校訂『枕草子』（岩波文庫）

沖は千尋の海原である。乗り込んだはかなげな船は、見れば吃水余すところ一尺までの積荷満載であり、不安に見ているところ、そんな心配はどこ吹く風、荒くれ水夫たちが足音もすごくやってきて「ほいほい」と更に二三尺に切った松の丸太を積み上げた。ああ、そんなにも乱暴に積み込んで、なんと危なかしいことを…というところであろうか。

さて、これは如何なる情景を描いたものであろうか。ここで、水夫たちが「ほうほう」「ほいほい」と気軽に調子よく投げ入れている「もの」とは何であろうか。船はすでに岸を離れたかに窺える文脈だが、松の丸太を荷の上に更に積み上げているのである。二三尺くらいの短い木なれば建材用の積荷でもあるまい。丸木のままとすれば薪木でもあるまい。

現代語訳の『枕草子』上坂信男・神作光一（講談社）では、ただ材木を投げ入れたこととして特別の注釈はない。諸碩学の枕草子研究類書も同じである。

だが、ここに至って卓説の登場である。『枕草子』増田繁夫校注（和泉書院）によれば「…切口が二三尺の丸太。防舷材とする説もあるが（解環）、それなら、荷を積んだ最後に取り付けるとは考えにくい」と注釈が付けられている。

この(解環)こそ『枕草子解環』萩谷朴(同朋舎)である。萩谷説は、ずばり「この二三尺の松の丸木はペンドル(防舷材)ではないか」との指摘である。増田注釈には「それなら、荷を積んだ最後に取り付けるとは考えにくい」と疑念が付けられる。

だが、これをペンドルとすれば、私、船人としては納得がいくのである。少年期、瀬戸内の櫓船を操って夏休みを過ごした身にとってはペンドルは馴染みの言葉である。ペンドルとは船が岸壁や僚船に接触する際の防舷材、船に付けた備品であれば、荷を積んだ後の出港に際してこれを引上げることは自然な作業である。

清少納言が記録したものは、正確には当時の「防舷材のようなもの」と言うべきであろうが、これがペンドルなれば、清少納言の目には留まらなかったが、引き上げやすいように縄が付いていたはずで、二三尺の少し太めの丸太であるとしても、水夫たちが、出港の心意気、陽気に鼻歌交じりで「ほうほう」とわけなく引き上げて、船の荷の山に次々に放り上げたのであろう。行間にそのような情景が伝わってくる。

果たして「真実や如何に」と興味は尽きない。

ペンドルとは、勿論、平安期の言葉ではない。

実は、ペンドルという言葉自体、いまだその所以が謎の言葉である。最新版の『ヨット、モーターボート用語辞典』ヨット、モーターボート用語辞典編纂委員会(舵社)によれば「ペンドル：フェンダーの日本での訛(なま)り」とある。ついで「フェンダー(fender)：岸壁や他船に横付するとき、外舷に吊して損傷を防ぐもの。漁師たちはペンドルと呼び、旧海軍では防舷物(ぼうげんぶつ)といった。古タイヤ製もあるが、肉厚の軟質塩化ビニル樹脂を袋状に加工し、ポンプで空気を注入して膨らませたものがよく使われている。また、軟質発泡体をキャンバスなどで包んだものもある。岸壁に付け置くものは、合成ゴムの頑丈な形成物が最適とされる」。『航海図鑑』航海訓練所編(海文堂)はバウフェンダ、ロープフェンダ、コルクフェンダ、木製フェンダ、竹製フェンダ、タイヤフェンダ、膨張型フェンダと分類する。

付言すれば、これらは甲板用具(Deck Sundries)の一つであるが、防舷材(fender)と言う場合には船体の一部としての張出部分も含めることになる。防舷材には(1)船に付具されたペンドル(2)船体の張出部(3)岸壁の構造物の3種類があり、加えればタグボートが装備しての船首タイヤや押出舷もフェンダーと言ってよい。

『新英和大辞典』岩崎民平編（研究社）にはペンドルはないが、p-語周辺にpendulous(吊り下げる)やpendulum(振り子)がある。実際の防舷材の形状が連想され、文明開化の頃、西洋水夫の防舷材の振り子状の扱いや、語音から日本の水夫や漁民に訛語としてペンドルが伝わったのか、いや、もしかしてこの言葉は、より広くアジア、アラビア、ヨーロッパを包含する古来よりの船人たちに慣れ伝わった、一種の国際語の系譜の東端にある例かもしれない。まことに思いは尽きないのである。

現代のペンドル（東京港・日の出桟橋にて）

『枕草子』「うちとくまじきもの」の段、「ほうほう」の作業の解釈がこれから如何に合意されるのか、大いに期待して捨て目の小稿を終わる。

（テラシタ　ヒデアキ）

図書館からのお知らせ

３月に卒業する皆さんへ

図書館で借りた本の返却を忘れていませんか？
返し忘れている本がないかどうか、もう一度確かめましょう。
最終返却期限は３月１５日（水）です。

皆さんの借りている本は、続いて後輩が利用するものです。返却されないと困る人がたくさんでてきます。後輩たちのためにも必ず返却してください。また、借りたまま卒業すると、実家や就職先に督促の連絡をすることになります。

卒業後も本を借りたい方は

５００円の登録料で、１年間（申請日から翌年の申請日まで）有効な『図書館利用カード』を発行します。４月以降の申し込みとなります。
貸出冊数３冊、貸出期間１ヶ月です。ぜひ、ご利用ください。即日発行で、発行したその日から利用できます。

視聴覚室は２月１日（水）～４月７日（金）まで閉室します。

****

卒業記念展示

日　時　３月２４日(金)　９時～１４時
場　所　図書館１階展示コーナー
展示品　源氏物語扇面貼交屏風（げんじものがたりせんめんはりまぜびょうぶ）
　　文化元年(1804)制作　6曲2隻

卒業記念撮影

当日は閉館ですが、屏風の前でも、館内でも、自由に記念撮影ができます。

****

アゴラ－鶴見大学図書館報－　第120号　2006年1月25日発行
編集･発行　鶴見大学図書館
〒230-8501　横浜市鶴見区鶴見2-1-3　Tel:045-580-8274　Fax:045-584-8197
鶴見大学図書館ホームページ　http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/